

討議集団の発達過程の実証的研究(II) : Tグループ における感情の測定

関, 文恭

吉田, 道雄

<https://doi.org/10.15017/82>

出版情報 : 九州大学医療技術短期大学部紀要. 4, pp.37-41, 1977-03-25. 九州大学医療技術短期大学部
バージョン : published
権利関係 :



討議集団の発達過程の実証的研究 (Ⅱ)

— Tグループにおける感情の測定 —

関 文 恭, 吉 田 道 雄

An Empirical Study of the Process of Group

Development on Discussion Groups (Ⅱ)

— Measurement of Emotional Response on T-Group —

Fumiyasu Seki and Michio Yoshida

問 題

Tグループの過程において生起する事象についての研究はこれまで多くの報告がなされてきた。

Bradford¹⁾はTグループにおける集団発達の位相について学習動機の視点から、防衛、集団形成、相互啓発の三位相を設定し、集団の発達にともなって、それぞれの位相が支配的になることを報告している。篠原⁴⁾は、Tグループにおいてこの三位相をリカートタイプの7段階尺度15問によって測定し、Bradfordの提起した位相の推移が生起することを見出している。また柏木²⁾は同じくBradfordの見解に対応づけて、Tグループの会合魅力度を測定し、セッション間の変動を核因子マトリックスによってメンバーの学習動機を分析した結果、Tグループが成功したと評定されるデータではセッション間に三つの成分を見出し、後期成分の寄与率が高いことを報告している。篠原⁵⁾は、このうち防衛要因の一因子性が保証されなかったことから感情用語を用いたチェックリストを用いて、その解釈を試みている。その結果、発揚性、抑うつ性、平穏さの三成分を見出し、またTグループが進行するにつれてネガティブな項目への反応が減少することを報告している。このチェックリストを用いることによって、Tグループのプロセスの中で、参加者が感じる感情的側面

を測定することが可能になり、これまで多く行われてきた行動評定(主としてリカートタイプによる質問紙評定)では測定が困難であったプロセスの微妙な差異を測定することが期待される。しかしながらこれらの40項目をア prioriにポジティブなもの、ネガティブなものに二分してしまうことには若干の問題があると考えられる。「静かな」を一例にとれば、従来これはポジティブな項目とされているが、果してそのようなラベルづけが可能であろうか。防衛段階において「静か」であることは、安定を連想させ、従ってポジティブな項目と考えられても、相互啓発の段階においても、「静か」であることをポジティブとすることは、少なくともTグループの効果的な発達を考慮に入れれば、必ずしも好ましいこととはいえないであろう。例えば、相互啓発の段階では、「カッカする」(ネガティブ)と同時に「スカッとした」(ポジティブ)、「腹だたいしい」(ネガティブ)と同時に「はればれした」(ポジティブ)というようなアンビバレントな感情状態こそむしろ好ましい集団の発達を示しているのではないかと考えられる。

本研究では、このような問題を基礎に、篠原の言うポジティブ、ネガティブな側面が生起するか否かを吟味し、更に40項目を詳細に分析し、Tグループのメカニズムを分析する。このような方法によって、単なる二分法的分類ではなく、

ダイナミックな分類のための基礎的なデータを提供することを目的とする。

方 法

<参加者>

看護学校学生（進学コース）38名（男子10名、女子28名）。参加者は第1セッション開始前に3グループに分けられた。グループ編成にあたっては、年齢を主な基準として、相対的に、若年、中年、高年グループに分けた。各グループの参加者の構成および平均年齢は表1に示す通りである。

表1 グループ構成

グループ	人数	男	女	平均年齢
1	13	3	10	20.5
2	13	3	10	23.8
3	12	4	8	32.6
計	38	10	28	25.4

<コーススケジュール>

昭和51年7月20日、21日の両日、福岡市東区に所在する某病院附属看護学校において、6セッション（1セッション約70分）のスケジュールで実施した。スケジュールは表2に示す通りであるが、学校側の事情により、講義時間のみをTグループにあてた。従って通常行われているような宿泊の形式をとらず、参加者は、2日間Tグループのために通学した。

トレーナーおよびリサーチスタッフとして筆者らを含め5名が参加した。

表2 Tグループ・スケジュール

	9:30	10:40	10:50	12:00	13:00	14:10	14:20	15:30
7/20			T ₁	昼	T ₂		T ₃	
7/21	T ₄		T ₅	食	T ₆			

<会合の雰囲気測定>

各セッション終了直後に40項目からなるチェックリスト（資料参照）への回答を求めた。これまでは、その時の気持にあてはまるものだけ

をチェックする方法（関、吉田、杉万）³⁾をとっていたため、人数やセッション数が少ない場合、まったくチェックされない項目も散見された。本研究では、このような項目の適、不適を含めて、リスト自身の内容的な吟味を行うために、40項目の形容詞のすべてについて「今の気持に△あてはまる△ △どちらともいえない△ △あてはまらない△」の3つの選択肢を用意し、このうちから強制的に選択させた。

結果と考察

データの処理にあたって、本研究においては、グループ要因およびセッションの要因を無視してプールされたデータを使用した。その理由は、この種のグループでは、得られるデータのNが極めて少なく、グループごと、セッションごとに分析した場合解釈にたえうる結果が得にくいこと、また本研究はTグループにおいて生起する雰囲気の感情的側面を測定する新しい試みであり、詳細な条件分析に先立って、全体的な知見を得ることが主なる目的であることによる。したがって、分析に用いたデータは38名の参加者の6セッション分の回答で、38名×6の延べ228となる。また、40項目については、△あてはまる△にチェックされた時1点、△どちらともいえない△2点、△あてはまらない△3点を与えて得点化した。このデータから相関行列を算出し、主成分分析を実施し、ノーマルバリマックス回転を行なった。この回転後の結果の1部を表3、4に示している。表3は2因子解、表4は6因子解の結果である。因子負荷量の絶対値.500以上の高い負荷量をゴチック体で示している。これまでの研究に基づいて2因子解によって雰囲気の肯定的側面と否定的側面の存在を確認し、更に詳細な構造を6因子解で求めることを意図した。いずれも負荷量.500以上を解釈基準とした。

表3によれば、その第Ⅰ成分は、肯定的雰囲気（感情）を示す成分であり、「ほがらかな」、「ホンワカした」、「はずんだ」……等の17項目が高い負荷を示している。一方、第Ⅱ成分は、否定的雰囲気（感情）を示すと解釈される成

分で「ゆううつな」、「弱々しい」、「苦しい」……等の18項目に高い負荷を示している。表3から明らかなように、2因子解においてTグループにおける雰囲気的情緒的反応は明確に分離している。すなわち第Ⅰ成分は肯定的側面を示し、第Ⅱ成分は否定的側面を反映する項目からなっている。Tグループのプロセスが進行し

てゆくなかで、Bradfordの防衛、集団形成、相互啓発といった段階が生ずるという仮説は、篠原⁵⁾によって確認されているが、そのようなプロセスに関連して生起する集団の風土(雰囲気)参加者の感情的認知も、肯定と否定の二側面に分離されることが確認されたといえよう。

表3 Normal Varimax 回転後(2因子解)の因子負荷量

項 目	因 子 負 荷 量		h ²
	Ⅰ	Ⅱ	
Q 3 ほがらかな	.657	.172	.461
Q13 ホンワカした	.634	.054	.405
Q14 快ろよい	.719	-.118	.530
Q16 堂々とした	.622	-.031	.388
Q19 はずんだ	.776	-.112	.615
Q21 愉快的な	.734	-.114	.552
Q22 はればれした	.759	-.105	.587
Q24 楽しい	.810	-.111	.668
Q25 あたたかい	.733	.127	.554
Q26 うきうきした	.735	.104	.551
Q28 うれしい	.755	.030	.572
Q29 力強い	.660	-.029	.436
Q32 はつらつした	.815	-.156	.688
Q33 明るい	.710	-.272	.578
Q34 そう快な	.768	.000	.591
Q37 情熱的な	.643	-.015	.414
Q39 スカッとした	.748	-.043	.561
Q 1 ゆううつな	-.347	.668	.566
Q 2 弱々しい	-.149	.616	.402
Q 4 苦しい	-.268	.649	.493
Q 6 よどんだ	-.234	.583	.395
Q 7 情けない	-.104	.769	.603
Q 8 はずかしい	.031	.629	.397
Q10 たよりない	-.175	.587	.376
Q12 カッカした	.127	.599	.375
Q15 悲しい	.059	.664	.444
Q17 くやしい	.010	.721	.520
Q18 いやな	-.253	.758	.639
Q20 おもくるしい	-.339	.651	.538
Q27 腹だたい	-.056	.724	.527
Q30 いまいましい	.155	.550	.326
Q35 いらいらした	-.112	.720	.530
Q36 つらい	-.165	.645	.443
Q38 さびしい	.158	.566	.345
Q40 もやもやした	-.171	.610	.401
Q 5 理性的な	.204	-.200	.082
Q 9 おだやかな	.454	-.310	.302
Q11 静かな	-.038	.321	.105
Q23 ドキッとした	.075	.427	.188
Q31 不安な	-.105	.497	.259
因 子 分 散	9.82	8.58	18.40
寄 与 率 (%)	24.56	21.45	46.01

更に詳細な検討を加えるために、解釈の基準を6因子解に求めたものが表4である。

表4によれば第Ⅰ成分では「ほがらかな」、「快ろよい」、「はずんだ」、「楽しい」……等の16項目が高い負荷量を示しており、2因子解の第Ⅰ成分とほとんど同じ項目が含まれている。これらの項目は、肯定的な反応であり、発揚性の因子と解釈できよう。以下同様に.500以上の高い負荷量を示した項目を各成分について見てみよう。第Ⅱ成分に高く負荷した項目は、「ゆううつな」、「弱々しい」、「苦しい」、「情けない」、「たよりない」、「いやな」、「おもくるしい」、「不安な」、「つらい」の9項目である。これらの項目は、心理的抑うつ状態を示していると考えられるので抑うつ性因子と解釈できよう。

第Ⅲ、Ⅳ成分に高く負荷する項目はすべてマイナスであるので、符号を無視して解釈することが可能である。第Ⅲ成分に高く負荷するのは、「カッカした」、「くやしい」、「腹だたい」、「いまいましい」、「いらいらした」の5項目である。これらの項目は、Tグループの場において満たされない感情がうっ積し、いまにも爆発しかねない状態を示していると考えられるので、攻撃的否定感情と解釈されよう。第Ⅳ成分では、「はずかしい」、「ドキッとした」、「さびしい」の3項目が高く負荷しており、内罰的否定感情と解釈されよう。

第Ⅴ、Ⅵの成分に高く負荷する項目数は少なく、かつ寄与率も4%以下なので残余の因子として解釈しないことにする。

表4によれば、Tグループの雰囲気的情緒的側面は、肯定、否定が同じ様に分化するのではなく、否定的側面のみが分化する様相を呈して

表4 Normal Varimax 回転後 (6 因子解) の因子負荷量

項 目	因 子 負 荷 量						h ²
	I	II	III	IV	V	VI	
Q 3 ほがらかな	.710	-.172	.033	.153	-.144	-.180	.611
Q 13 ホンワカした	.648	.027	-.093	.129	-.197	.064	.489
Q 14 快ろよい	.730	-.041	.178	.027	-.097	.120	.590
Q 19 はずんだ	.763	-.229	-.072	-.019	.034	.036	.643
Q 21 愉快的な	.800	-.137	.022	.046	.058	-.217	.713
Q 22 はればれした	.753	-.186	-.039	-.004	.167	.050	.634
Q 24 楽しい	.810	-.127	.091	-.025	-.034	.087	.690
Q 25 あたたかい	.695	-.083	.112	.047	-.002	.313	.603
Q 26 うきうきした	.713	-.015	-.105	-.128	.141	.161	.582
Q 28 うれしい	.752	-.034	.005	-.101	.009	.103	.587
Q 29 力強い	.557	-.093	.008	-.128	.233	.511	.651
Q 32 はつらつした	.785	-.163	.117	-.028	.024	.216	.704
Q 33 明るい	.698	-.255	.172	.089	-.272	.072	.670
Q 34 そう快な	.774	-.102	-.083	-.016	.009	.016	.618
Q 37 情熱的な	.501	-.130	-.094	-.037	.034	.627	.673
Q 39 スカッとした	.723	-.103	-.015	-.055	.179	.182	.602
Q 1 ゆううつな	-.282	.716	-.210	-.129	-.002	.000	.653
Q 2 弱々しい	-.108	.586	-.152	-.204	-.398	-.002	.578
Q 4 苦しい	-.167	.804	-.128	-.071	.105	-.019	.706
Q 7 情けない	-.084	.582	-.381	-.310	-.177	.077	.619
Q 10 たよりない	-.115	.553	-.160	-.200	-.309	-.103	.490
Q 18 いやな	-.187	.674	-.447	-.065	-.064	-.080	.704
Q 20 おもくるしい	-.213	.808	-.155	-.019	.056	-.138	.745
Q 31 不安な	-.088	.512	.100	-.488	-.033	.104	.530
Q 36 つらい	-.126	.610	-.186	-.321	.164	.045	.555
Q 12 カッカした	.074	.113	-.750	-.234	.135	-.002	.654
Q 17 くやしい	-.003	.288	-.666	-.290	-.143	-.114	.645
Q 27 腹だたしい	-.079	.373	-.743	-.060	-.086	.040	.711
Q 30 いまいました	.096	.133	-.754	-.038	-.007	.098	.606
Q 35 いらいらした	-.110	.406	-.639	-.150	-.062	-.050	.614
Q 8 はずかしい	-.013	.307	-.212	-.700	-.073	.066	.639
Q 23 ドキッとした	.035	.114	-.110	-.686	-.026	-.027	.499
Q 38 きびしい	.136	.229	-.275	-.576	-.087	-.043	.488
Q 11 静かな	-.071	.162	-.140	-.134	-.755	.044	.641
Q 16 堂々とした	.494	-.172	-.049	-.089	-.143	.509	.563
Q 5 理性的な	.148	.026	.138	.393	-.199	.478	.464
Q 6 よどんだ	-.202	.470	-.309	-.194	-.006	-.055	.398
Q 9 おだやかな	.418	-.317	.161	.124	-.465	.072	.537
Q 15 悲しい	.494	-.172	-.049	-.089	-.143	-.114	.472
Q 40 もやもやした	-.100	.495	-.432	.011	-.199	-.197	.520
因子分散	9.05	5.55	3.81	2.52	1.57	1.60	24.09
寄与率 (%)	22.62	13.87	9.53	6.30	3.93	4.00	60.22

いる。第Ⅱ～Ⅳ成分は、いわゆる否定的側面が分化することを示しており、第Ⅱ成分は抑うつ性の因子、第Ⅲ成分は攻撃的否定感情の因子、第Ⅳ成分は内罰的否定感情の因子と解釈された。抑うつ性の因子は、Tグループのプロセスの中で基本的に感じられるものであろう。無課題、無構造で進行するTグループにおいて、これらの反応は、最後まで多かれ少なかれもちつづけられる感情と考察される。攻撃的否定感情は何かをやろうとするにもかかわらず、トレーナー

の介入等によってそれが成功をおさめ得ない時などに生ずるもので、抑うつ性の因子と同様Tグループのプロセス全般にわたって生ずるものであるが、この感情傾向はTグループの中期以後に強くあらわれてくるのではないかと考えられる。また第Ⅳ成分の内罰的否定感情は、攻撃的否定感情とは対照的にTグループで感じられる不安や、いまいまして、どうしようもないという感情が外に出ることもなく内面に向けられた時に生起する感情であろうと考察される。

このようにTグループの雰囲気に対する感情は肯定的な側面と、否定的側面に分離され、また、否定的側面は更に三つの側面に分化していることが判明した。しかしながら本研究においては、グループ、成員の個人的属性、セッション等については全て無視して分析を行なった。このため検討が加えられていない側面についての分析が今後の課題として残されている。例えば、セッションを経るに従って、換言すれば集団が発達するに従って、これらの因子のどれが主要なものとして顕在化するか、また我々の仮説によれば、集団が発達することにつれて、単に肯定的な反応が増大するというものではなく、肯定、否定がダイナミックに結合しながら発達すると考えられるが、その結合状態は、どのような因子として現われてくるのかといった分析がTグループのもつ本来のダイナミックスやその効果についての指標を探索するに際して、重要なものとなるであろうと考察される。

要 約

本研究の目的は、Tグループにおける雰囲気の感情的側面を測定し、その因子的構造を明らかにすることにあつた。看護学校学生38名が3グループに編成され、6セッションのTグループに参加した。

主要な結果は下記のとおりである。

1. Tグループの雰囲気の感情側面は、肯定的感情と否定的感情に大きく二分される。
2. 否定的感情は抑うつ性の因子、攻撃的否定感情の因子、内罰的否定感情の因子に分化していることが明らかになった。

付記

- 1, トレーナー, リサーチスタッフとして参加していただいた九州大学保健管理センター講師峰松修, 九州大学教育学部大学院石井京子, 光雷由紀の諸氏に深く感謝する。
- 2, 本研究の数値計算には九州大学大型計算機センターFacom230-75を使用した。

資料 会合の雰囲気

今の会合であなたはどのような感じや気分をいだかれましたか。あてはまるところに○印をつけて下さい。

	そ う	ち が う		そ う	ち が う
1. ゆううつな			21. 愉快的な		
2. 弱々しい			22. はればれした		
3. ほがらかな			23. ドキッとした		
4. 苦しい			24. 楽しい		
5. 理性的な			25. あたたかい		
6. よどんだ			26. うきうきした		
7. 情けない			27. 腹だたしい		
8. はずかしい			28. うれしい		
9. おだやかな			29. 力強い		
10. 頼りない			30. いまいましい		
11. 静かな			31. 不安な		
12. カッカした			32. はつらつした		
13. ホンワカした			33. 明るい		
14. 快ろよい			34. 爽快な		
15. 悲しい			35. いらいらした		
16. 堂々とした			36. つらい		
17. くやしい			37. 情熱的な		
18. いやな			38. きびしい		
19. はずんだ			39. スカッとした		
20. おもくるしい			40. もやもやした		

会合No. _____ 回 _____ グループ名 _____
氏 名 _____

文 献

- 1) Bradford, L. P. : Membership and the learning process. In Bradford, L. P., et al (Ed.), T-group theory and laboratory method. New York: John Wiley, 1964.
- 2) 柏木繁男: 核因子マトリックスによるTグループの学習動機の研究, 心研10, 1, 1—11. 1969.
- 3) 関文恭, 吉田道雄, 杉万俊夫: 討議集団の発達過程の実証的研究(I), 九大医短部紀要 3, 49—58, 1975.
- 4) 篠原弘章: 討議集団における会合雰囲気の測定(I), 熊大教育学部紀要23, 第2分冊, 183—193, 1974 a.
- 5) 篠原弘章: Tグループのプロセスに関する心理学的研究(IV), 日心第38回大会発表論文集658—659, 1974 b.